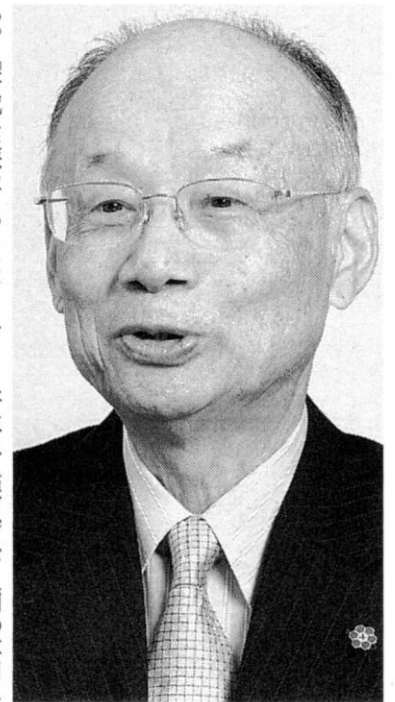


北里研究所 名誉理事長

おむら さとし
大村 智さん



北里研究所名誉理事長の大村智さん(75)は米製薬大手、メルクとの共同研究を通じ家畜の寄生虫を駆除する抗生物質を実用化した。イベルメクチンと名付けられた薬は世界的なベストセラーとなり、北里研究所に約250億円ものロイヤルティー収入をもたらした。おそらく知的財産で最も多額の資金を稼いだ日本の科学者だろう。

か。「研究を経営すること」こそが生涯の課題と思っています。イベルメクチンは人間の病気に効くこともわかり、現在、世界保

寄生虫(線虫)が人間の体内に侵入し、皮膚の下や目の中に入り込むと、皮膚が猛烈にかゆくなったり失明したりします。かゆみに

で失明していました。子供に手を引かれて歩いている男性に声をかけると、彼は「薬ができたおかげで病気を子供たちに感染させないでいられるのがうれしい」と話してくれました。

イベルメクチンで、失明した患者が再び光を取り戻すことは残念ながらかなわない。でも、皮膚のかゆみはおさまり、不自由ながら日常生活は送れるようになります。最大の効能は失明を防ぐとともに、寄生虫が体内で増えるのを阻止し、新たな感染拡大を防げる

寄生虫駆除薬でロイヤルティー収入250億円

社会に役立つ研究どう持続するか、生涯の課題

WHOの熱帯病撲滅作戦に採用、1.2億人を守る

研究費が乏しい中で、いかに優れた研究をするか。私が半世紀に及ぶ研究者生活でいちばん気をつかってきたことです。資金がないから研究ができないというのは言い訳です。とにかく研究費を集めて研究し世の中に貢献すれば、必ずまた研究費は入ってくる。いかに社会に役立つ研究を持続する

健機関(WHO)によるアフリカの熱帯病の撲滅作戦にも採用されています。2004年に西アフリカのガーナとブルキナファソを訪問しました。イベルメクチンを使った熱帯病の撲滅作戦の現場を視察するためです。この病気はオンコセルカ症(河川盲目症)と呼ばれ、ブヨが媒介する寄生虫が原因で起きます。

点です。

WHOは1980年代後半からアフリカでオンコセルカ症の撲滅作戦を開始、2020年までに新たな感染者が生まれない状態にすることを目指している。メルクはWHOの要請を受け、薬を無償で提供している。

無償供与なのでWHOの作戦からはメルクにも私にも、お金は入りません。でも、この薬の経口投与でこれまでに1億2千万人あまりの人々が感染から守られたと聞き、本当にうれしく思います。

か。「研究を経営すること」こそが生涯の課題と思っています。イベルメクチンは人間の病気に効くこともわかり、現在、世界保

寄生虫(線虫)が人間の体内に侵入し、皮膚の下や目の中に入り込むと、皮膚が猛烈にかゆくなったり失明したりします。かゆみに

で失明していました。子供に手を引かれて歩いている男性に声をかけると、彼は「薬ができたおかげで病気を子供たちに感染させないでいられるのがうれしい」と話してくれました。

イベルメクチンで、失明した患者が再び光を取り戻すことは残念ながらかなわない。でも、皮膚のかゆみはおさまり、不自由ながら日常生活は送れるようになります。最大の効能は失明を防ぐとともに、寄生虫が体内で増えるのを阻止し、新たな感染拡大を防げる

最近、科学の力で世界に貢献する「科学外交」という言葉を聞きますが、イベルメクチンはその先駆けではないでしょうか。日本人の私たちが見つけた微生物がこの薬を生み出し、それが世界に貢献し、世界から評価されています。北里研究所の創立者であり、感染症研究で歴史に名を残した北里柴三郎博士は「実学の精神」を説きました。また、北里での私の師である秦藤樹先生は抗がん剤のマイトマイシンの発見者です。私も、人の役に立つ薬をつくりたいと願ってきました。

研究を経営しよう

①

学生時代はスキー競技に明け暮れる体育系学生でした。学業も格別できるわけではなく、科学者になることなどまったく考えていませんでした。いったん教師になり、人生の進路を迷ったときに導き役になったのは、大学時代の恩師でした。

(聞き手は編集委員 滝順一)